2020 50th Anniversary

名古屋芸大グループ通信

47
April
2019

第46回卒業制作展／第23回大学院修了制作展

声優アクティングコース
1年生修了公演
「Dream Chasers」開催！

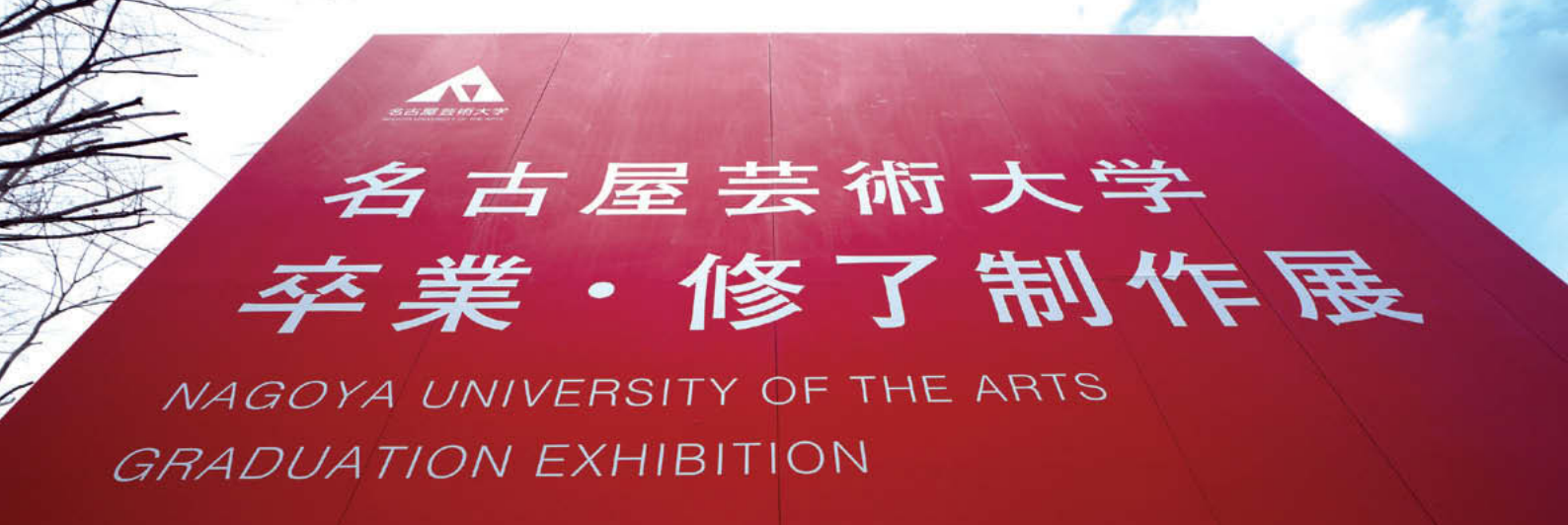
特別鼎談
自分が学んだことを社会に役立てる
芸大生のキャリアデザイン

Master Artist
マスター アーティスト
挑んでこそ
美術領域
アートクリエイターコース　准教授
中田ナオト

News/Topics
ニュース&トピックス
■ 2018年度
ブライトン大学賞授与式と祝賀会が
行われました
■ 第3回 みんなのハッピーカーコンテスト
本学カーデザインコース学生が
審査員を務めました
■ 出版

NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS
名古屋芸術大学グループ
http://www.nua.ac.jp

■名古屋芸術大学　大学院：音楽研究科　美術研究科　デザイン研究科　人間発達学研究科
学部学科：芸術学部　芸術学科　音楽領域　デザイン領域　美術領域　芸術教養領域
人間発達学部　子ども発達学科
■名古屋芸術大学保育専門学校
■名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園
■滝子幼稚園　■たきこ幼児園
■愛知保育園　■名古屋音楽学校



Feature 第46回卒業制作展／第23回大学院修了制作展

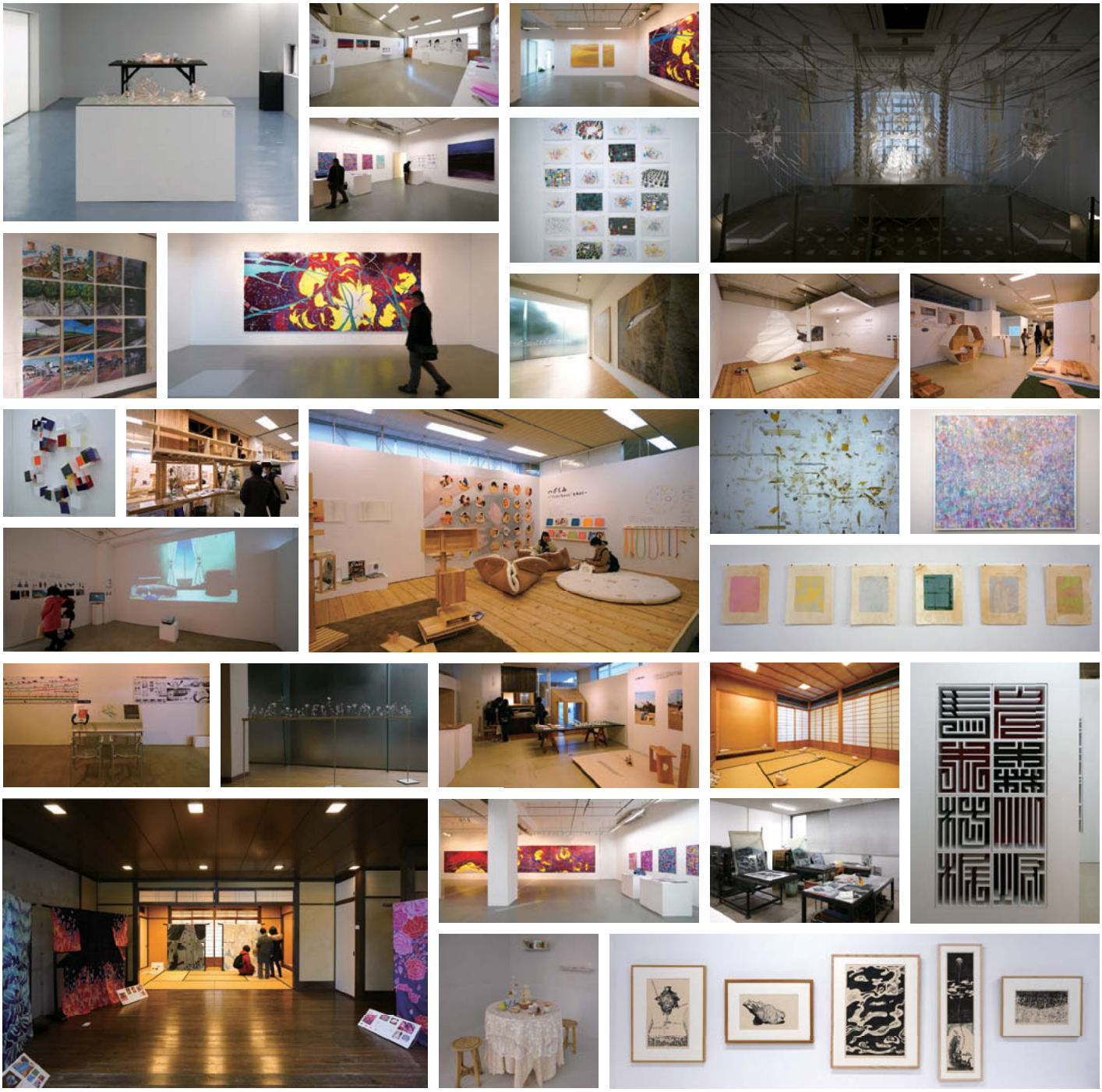
2019年2月16日(土)〜3月3日(日)、西キャンパスにて卒業制作展、修了制作展が開催されました。学生時代の集大成となる作品、コースごとの特色に加え、個人それぞれの個性が加わり、見応えのある力作揃い。西キャンパスでの開催は今回でまだ2度目ですが、カフェの出店やスタンプラリー、ラジオ放送に演奏会と、盛りだくさんのアートイベントとなりました。

卒業制作展・修了制作展、開催にあたって

芸術学部長 学長補佐 教授　萩原 周

昨年から始まったキャンパスの開催ですが、本年の目標としましては、お客さまに来ていただける卒業制作展、修了制作展にするということでした。本学は、都心からは少し離れた立地ですので、何かの折りに寄っていただけるような場所ではありません。それでも、見に行って見てみたい、見なくちゃいけない、そんな動機付けをどのように行うか、そこが第一のポイントでした。

そのため、今回の展覧会では昨年よりも会期を長くしてみました。機会を増やすことで、できるだけ多くの人に見ていただけるように、かつ、広報的な観点からも訪れてくれた方々のSNSによる発信などの波及効果が期待できると考えました。また、ジブリの鈴木敏夫さん、アートディレクターの森本千絵さん、建築家の手塚貴晴さんと、アートに関心のある方以外にも幅広く注目を集めるお三方に講演していただくことができたことも非常に幸運でした。事前に、卒展、修了展の専用Webサイトによる告知を行い、多くの方に少しでも関心を持っていただけるよう努力してきました。こうしたこともあって土曜、日曜に関しては、まずまず集客できたのではないかと思います。会期中に訪れたアートコレクターの中には、その場で何点かの作品を購入されたとも聞いていますし、他の展覧会へのオファーへつながったという話も聞いていま



す。卒展、修了展がこうして学生たちにチャンスを与える機会にもなり、非常に喜ばしく感じています。

本学に足を運んでいただいた方々、特に保護者の方々には、ご子息、ご息女が普段こういう場所で学び、制作を行っていたのかと、非常に濃厚な体験をしていただけたのではないかと思います。また、一般の方々にとっても学生の作品や工房など、一般大学とは異なった光景をご覧いただけたことと思います。こうしたことで関心を持っていただき、生涯学習や公開講座など、大学が地域社会へと開かれた形へ発展していけるよう継続していきたいと考えています。

今年、初めての試みとして東キャンパスから音楽領域の学生に協力をあおぎ、演奏会も開催しました。また、人間発達学部に関連する試みとして、附属のクリエ幼稚園児の絵画展も開催しました。演奏会に関しては、会場が体育館という場所柄、告知方法などについて反省すべき点もいくつかありますが、改編以来進めてきました「ボーダーレス」という考えを、今後の卒展、修了展でも一層積極的に推進していきたいと考えています。

100%満足できる卒展、修了展に向けて、一朝一夕にはできないかもしれませんが、時間をかけながら、より良いものへと育っていって欲しいと思います。学内が日常的には制作の現場であり、それが時期によって展示の場となる、そしてまた日常に戻る。そんなカルチャーも生まれてきています。今後は本学が、この地域のアートとデザインのホットスポットになれるよう、さらにこの事業をもり立てていきたいと思います。

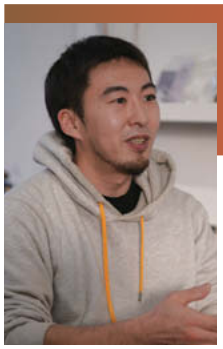
人間発達学部の協力を得て「幼稚園の絵画展」が企画され、卒業制作展と同時開催されました

音楽領域の学生による演奏会も行われ、学部・領域を越えた融合のかたちを示す卒業制作展となりました

卒業制作／修了制作　創作中インタビュー

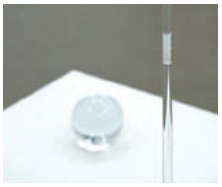
「学びを作品として昇華させるために」

卒業制作は、学生時代の集大成。美術、デザインコースの学生にとって、自分が学んできたことを形にする最も重要な課題の一つです。それぞれの考えや個性を反映しつつ、クオリティを高め作品に仕上げます。これまで学んできたことを自分の作品として昇華させるため、どの学生も産みの苦しみと楽しみを感じているはず。とりあえず作ってみる人、じっくり考えてから行動に移す人、方法はそれぞれですが、制作期間の間はどの学生もそのことで頭はいっぱい。お話を伺ったのは、制作期間の後半にあたる1月なかば。制作にどっぷりと浸かる学生に、取り組んでいることについて伺いました。



ガラスでなければ できないことを

大学院 美術研究科 | 植村宏木さん



美術の中でガラスという分野はもっとできること、可能性があるんじゃないかと思っています。私は、北海道で生まれ、ガラスがやりたくて秋田へ、美術の勉強もしたくなって、瀬戸市新世紀工芸館を経てここにいます。秋田にいた頃から、ガラスでできることは何なんだろうかとを考えつつ探しながら場所を移してきました。ガラスは、焼き物なんかとくらべると歴史が長いわけではありません。まだまだこれからだと思います。そういうことをじっくり考える時間が欲しかったんだと思います。

ガラスは、何となく感じることができるけども実際に見ることのできないもの、例えば、空気や気配、あるいは時間の感覚や記憶といったものを表現するのに適した素材ではないかと思います。見えないものをあやふやな立ち位置で表現することに適していると考えています。溶けたガラスは、自在に形を変えることができ、水で形作れるものであればガラスでも作ることができるといわれています。扱いにくい素材のように思われますが、間接的ですが手で形を変えることもできますし、重力や遠心力を使って自然な曲線を作ることのできる素材です。技術を修得するために時間がかかりますが、最近になってようやく作りたい形をどうやって作っていけばいいのかだんだんわかって来ました。

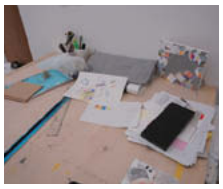
●●●

今回は、ホワイトキューブ、なにもない白い空間での展示になります。これまでは、アートプロジェクトなどで展開することが多く、その場合はその場所が抱えている古い民家だったり、神社やお寺だったりするんですが、気配や記憶を主題として作品を作って来ました。今回の展示はこれまでとは逆で、いろんなものを削ぎ落とし日常から切り離された空間で、あえていえば、外部から気配や記憶を持ち込むことになるわけです。今回はその空間にある、削ぎ落としても落としきれなかった部分、たぶん、空気だったり、重力だったり、目に見えないエネルギーのようなものを表現することになると思います。

もう一つ、ガラスの位置付けについても考えています。ガラスによく似たものに樹脂がありますが、ガラスは割れたり、欠けたりするという大きな違いを持っています。歴史的にも、中国や欧州では宝石よりも価値の高いものとして扱われたこともあります。そうした素材が持っている精神性のようなもの、ガラスならではの表現を追求したいと考えています。

自分のできることを とことんまで

美術学部 美術学科 洋画2コース 4年 | 井上七海さん



高校から美術科に通っていました。高校生の頃は、具象や静物、デッサンばかり、いかにも高校生が描くような絵を描いていました。大学に入って、デッサンをやっていても、ある程度描けたらそこで止まってしまい、それ以上いいものは作れないということが悩みでした。

絵の構成を考えたときに、「抜け」ってあるじゃないですか。しっかり描く部分と、あえてあまり描かない部分。私は、全部きっちり描きたいと思っていて、すごく苦戦しました。ただ、逆に考えてみると、全部に手を入れるというのは、忍耐が必要で地味な仕事なんですが、私にはそれができるな、全部に手を入れる感じで描いてみようと。やってみたら気持ちにしっくり来る絵が描けるようになりました。描きたいものがあってというよりも、自分ができること、自分の一番得意なことをやっていった、そんな感じですね。

●●●

コンピュータを使って正確に線を引いたものと、全部の線を手で引いたものと、両方あります。手で引くと、どうしても線がずれるんです。最初は、そのずれが嫌いでしたが、手作業だから当たり前、ずれをそのまま残して手作業の感じを残そうということを考えています。トレーシングペーパーを重ねたり、メディウムで厚みを作り、見る角度でずれが変わるようなものも描いてみています。まっすぐな作品もあれば、ずれた作品もある。雪の結晶なんかでも完全な形になっているものしか取り上げられませんが、実際には形の崩れたものが大多数ですよね。それも魅力的なことじゃないのかなと思うんです。つまらないと切り捨てられてしまいがちですが、それもとても大事なんじゃないかと。まっすぐなものと、ずれたもの、この2つはまだ私の中でぶつかってはいないですが、この2つで当面はやっていきたいなと考えています。2つのことを考えているときのほうが、いろいろ思いつくということもあります。

問いかけるデザイン

デザイン学部 デザイン学科
デザインマネージメントコース4年 | 鈴木瑛士さん

テーマとしてはVR（バーチャル・リアリティ）があります。これから普及していったときに、人間にどんな影響を与えるか、そのことについて考えてもらえるような作品になればと思っています。

物語の主人公は、自分の生きている現実の社会に幻滅していて、VRを使ったバーチャルの中と二重生活をしています。VRに希望を見出し、現実とバーチャルの境界を越えようとしています。主人公は、現実を否定的、VRを肯定的に述べているのですが、どちらがいいのか作品を見た人にその部分はゆだねる形を採ろうと思っています。

VRに限らず、ロボットと人間、AIと人間など、テクノロジーに合わせて人間は適応していき、結果、いろいろに分かれていくんじゃないのかなと考えています。また、人間を人間たらしめるもの、どこまで行ったら人間じゃなくなるのかとか、自分でなくなるとか、そうしたことが大事になってくるのではと思います。テクノロジーが普及して誰もが日常的に使うようになっていくと、そういった問題が置き去りにされてしまうのではないかと思います。テクノロジーは、豊かさや便利さを与えてくれるものですが、使い方によってはモラルの低下を招いたり、依存してしまうような人が出てきたりします。こうした展示で、一旦立ち止まって自分はどうしていけばいいのか、考えていただければと思っています。

●●●

「スペキュラティブデザイン」という、未来はこうもありえるのではないかという憶測を提示し、問いを創造するデザインの方法論があります。デザインは、社会や生活などを豊かにする提案を行うことが目指すべきところなんですが、スペキュラティブデザインのように問いを提示することもデザインの一部としてあって、すごく重要なことではないかと思います。自分はテクノロジーとどうやって付き合っていくか、作品の背景にあるものはどういったものなのか、結論を出すことも大事なことですが、まずはそういうことを考えてもらうこと、そのこと自体が重要なんじゃないかなと思っています。

卒業制作展・修了制作展 記念講演会

2月16日、23日、3月3日と3週にわたり、3名のプロフェッショナルをお迎えして、記念講演会を行いました。講演会は、事前の申し込みで一般の方にも公開されましたが、いずれも定員を大幅に上回る申し込みをいただきました。同じ業界で働いていると思われる、社会人の方の受講も見受けられました。各分野で注目を集めるプロフェッショナルだけに、それぞれ興味深いお話ばかり。学生たちも、大いに刺激を受けているようでした。

「ジブリの仕事術」

鈴木敏夫氏
スタジオジブリ代表取締役プロデューサー

1948年、名古屋市生まれ。慶応義塾大学文学部卒業後、徳間書店入社。『週刊アサヒ芸能』を経て、『アニメージュ』の創刊に参加。副編集長、編集長を務めるかたわら、「風の谷のナウシカ」「火垂るの墓」「となりのトトロ」などの高畑勲・宮崎駿作品の製作に関わる。

1985年にスタジオジブリの設立に参加、1989年からスタジオジブリ専従。以後ほぼすべての劇場作品をプロデュース。

著書に『仕事道楽 新版–スタジオジブリの現場』(岩波書店)、『ジブリの哲学–変わるものと変わらないもの』(岩波書店)、『風に吹かれて』(中央公論新社)、『ジブリの仲間たち』(新潮社)、『ジブリの文学』(岩波書店)、『人生は単なる空騒ぎ一言葉の魔法』(KADOKAWA)、『禅とジブリ』(淡交社)、『南の国のカンヤダ』(小学館)などがある。

2月16日(土)、スタジオジブリプロデューサー 鈴木敏夫氏の講演会が行われました。アニメやメディアに関心のある学生だけでなく、幅広く注目を集める人物だけに、一般の方からも講演会参加にたくさんの申し込みを受けました。できる限り対応できるようLIVEビューイング会場を設けるなどしましたが、それでも席が足りず抽選となるほどの盛況ぶりでした。

講演は、アニメや漫画に造詣の深い文芸・ライティングコースの禧美智章講師がホストとなり、鈴木氏がそれに応えるという形式で行われました。宮崎駿氏、故高畑勲氏との関係やそれぞれの個性について興味深いお話がたくさんありました。作品の芸術性を失わずヒット作を連

「ご縁とデザイン」

森本千絵氏
株式会社goen° 主宰、コミュニケーションディレクター、アートディレクター、武蔵野美術大学客員教授

1999年武蔵野美術大学卒業後、博報堂入社。'06年史上最年少でADC会員となる。

'07年「出逢いを発明する。夢をカタチにし、人をつなげていく。」をモットーに、株式会社goen° を設立。NHK大河ドラマ「江」、朝の連続テレビ小説「てっぱん」のタイトルワーク、「半分、青い。」のポスターデザインをはじめ、Canon、KIRINなどの企業広告、松任谷由実、Mr.Childrenのアートワーク、映画や舞台の美術、動物園や保育園の空間ディレクションなど活動は多岐に渡る。

11年サントリー「歌のリレー」でADCグランプリ初受賞。N.Y.ADC賞、ONE SHOWゴールド、アジア太平洋広告祭ゴールド、SPACESHOWER MVA、50th ACC CM FESTIVALベストアートディレクション賞、ADFESTヤングコンペ日本代表、伊丹十三賞、日本建築学会賞、第4回東奥文化選奨、日経ウーマンオブザイヤー2012など多数受賞。二子玉川ライズクリスマス2018「Merry Tick Tock」プロデュース、キネコ国際映画祭アーティスティック・ディレクター兼、審査委員長を務める。

2月23日(土)は、「株式会社goen° 」を主宰する森本千絵氏の講演会が行われました。

講演は、森本氏の学生時代の卒業制作についての話から始まりました。中学生の頃から広告に関心を持ち、美大に進みたいと考え実現したこと、学生時代は研究室にMacが入って来た頃で、合成の作品ばかり作っていたことが語られ、さらに短大時代の卒業制作作品が披露されました。短大から4年制に編入し、人の目や成功例に捕らわれずやりたいことに素直になって制作に向かったほうがいいと先輩からアドバイスを受けて作品が変わり、多くの人とコミュニケーションを取ることを目的にワークショップを行うようになったそうです。

大事にしていることに「アイデアを出すこと」を

「建築が世界を変える」

手塚貴晴氏
建築家、株式会社手塚建築研究所代表、東京都市大学教授

武蔵工業大学卒業後、ペンシルバニア大学大学院へ進学。1990-1994年リチャード・ロジャー ス・パートナーシップ・ロンドン勤務後、1994年に手塚建築企画を手塚由比と共同設立(1997年手塚建築研究所に改称)。

主な賞に日本建築学会賞(2008年 ふじようえちえん)、日本建築家協会賞(2008年 ふじようちえん)、グッドデザイン金賞(1997年 副島病院)(2013年 あさひ幼稚園)、学校施設好事例集(第4版)最優秀賞、OECD/CELE(2011年 ふじようちえん)、日本建築家協会 優秀建築賞(2015年 空の森クリニック)、Global Award for Sustainable Architecture 2017、Moriyama RAIC International Prize 2017(Fuji Kindergarten)

著書に手塚貴晴+手塚由比『きもちのいい家』(清流出版)、手塚貴晴+手塚由比『やねのいえ(くうねるところにすむところ—家を伝える本シリーズ)』(平凡社)など。

3月3日(日)は、建築家の手塚貴晴氏の講演会が行われました。

手塚氏は、トレードマークの真っ青の服装で登壇し、家族の写真を紹介し、建築の原点は家族にあると話します。「建築はものを創るだけではなく、そこで何が起こるか考えることが大事」と説明し、その建築が存在することで、その場所でどんなことが起こるかを予想しなければいけないと言います。

「屋根の家」、「ふじようちえん」、宮城の「あさひ幼稚園」、さまざまな「教会」など、手塚氏の代表的な作品を提示され、それぞれのコンセプトと建設後どんなことが起きているかを説明しました。建物をドーナツ型にした「ふじようちえん」は、

発する敏腕プロデューサー、作家性とエンターテインメント性を両立させるために腐心しているかと想像しますが、宮崎氏とただただ一緒に仕事を続けたかった、映画は一度興行的に上手くいかないと制作のチャンスがなくなる残酷な世界、とにかく一緒に仕事がしたかったと、仕事へのモチベーションを語り、非常に印象的でした。

今回の卒業制作展の感想として語られたのは、「抽象作品が多い」ということでした。そして、なぜ抽象化するのか、という問題提起があり、映像と文章の特性や表現の違いについての考えが述べられ、抽象的な事柄を映像で見せる工夫など、深く考えさせられる内容がいくつもありました。

映画制作では、出資者に映画を魅力的に語る必要がありますが、それだけに鈴木氏の話す言葉はとても面白く、ときには進行の禧美氏をはぐらかしたり、逆に質問したり、禧美氏がたじたじとなる場面もあり、聴衆の心をつかんで離しません。出資者はもちろん、作家も鈴木氏の発する言葉の魅力に創作を続けたことが実感できます。あらためて、言葉の重要性を強く感じました。

絵を描くことについて、宮崎氏は観察力がすごく、描けなくなったら見に行く、観察と描くを繰り返している、見ることが一番大事ではないかと講演をまとめました。

進行は文芸・ライティングコースの禧美智章講師が担当。鈴木氏から逆に質問され、たじたじとなる場面も

鈴木氏に直接質問することのできる貴重な機会とあって、質疑応答では多くの手が上がりました。ジブリのことや、絵のこと、仕事についてのことなど、多岐にわたりました

挙げ、「アイデアはあっても口に出さないことが多く、アイデアは出ないと思い込んでいる。口に出すことが大事で、技術を身につけてたくさんの経験を積んでも子どものような存在でいるように心がけている。恥ずかしがらずにアイデアを出していきたい」と話しました。

松任谷由実やMr.ChildrenのCDアートワークが紹介され、それらを制作したときのプレゼン資料を披露して下さいました。「プレゼンはおもてなし」と考え、大量に制作するとのことです。「自分のアートを見てもらうということよりも、依頼していただいた方と一緒に創りたい。そのため何かのきっかけになりそうなものをできる限り考えて提案する」と語りました。実際に、数々のアイデアがまとめられ、1本のPVになったり、プレゼンで使った音楽が別の企画につながったりしていることが、制作された映像を再生しながら示されました。

また、企画は会議室で考えるのではなく、自分のプライベートの中で、家族や近くにいる人と関連させて考え、それを仕事へとつなげていると話します。直接答えを探しに行くのではなく、寄り道しながらいろいろなアイデアを結びつけていく方法が、無駄にならず、広告の背景にある豊かさにつながっていくのではないかと考えさせられました。

最後に、広告は「人が人に出会うためのもので、その間をお手伝いする仕事」と話し、講演を終えました。

できあがった作品に加え、その企画書やアイデアスケッチなど、なかなか見ることのできない貴重な資料が披露されました。アイデアの源が示され、非常に有意義なものとなりました

「遊ぶ」ことをテーマに設計されており、木が枯れないように木の根を切らずに済むよう建物に工夫がされており、子供たちが走り回っても振動が響かないような構造になっていると説明します。「遊具は、何かさせるために作られているが、ふじようちえんでは、子供は勝手に走り出す。人間に何か自発的に行動させる。これが建築の力」と語ります。「屋根の家」では、夏は暑く、冬は寒いという批判に、そこに住む人から、暑い寒いは当たり前で、人間は環境に適応できると反論があったことを紹介し、人間の適応力を引き出しつつ、できるだけ快適に過ごせるようさまざまな工夫がされていると説明しました。「技術が発達すると、その技術は気が付かれない存在になり、人が人らしく生活できるようになる」という、技術と人間の捉え方が印象的でした。数多くの作品写真や動画には、そこに生き生きと生活する人の姿が表示され、使う人を基本に考えていることがとてもよく伝わり、そのことが実感できる講演でした。

質疑応答の前には、実際に手塚氏に自宅を設計してもらった人が登壇し、設計までの経緯や実際に住んでみての感想など、貴重な生の声を聞くことができました。「建築は、創ったら40年、50年は残り、その時間に耐える価値を考えなければいけない。使う人にとって思い入れのある、大事にしてくれるものを作ることが重要」と講演を締めくくりました。

「建築の原点」であるという手塚氏の家族を紹介

手塚氏が設計したお宅に住む方が登壇。設計までの経緯や住み心地をお話し下さいました

スペースデザインコース 駒井貞治准教授。「建築は施主の要望によって、はじめに考えたコンセプトは弱められて行くが、手塚氏の作品はそれが最後まで失われず、さらに魅力が増していく」と手塚氏を紹介

声優アクティングコース1年生修了公演「Dream Chasers」開催！

2019年1月20日、東キャンパス3号館ホールにて、声優アクティングコース1年生修了公演「Dream Chasers」が開催されました。

声優、アニソン歌手、2.5次元ミュージカルと“舞台に立つ”ことのできる人材を育成する声優アクティングコースが設置されて1年、学んだ成果が早くも公演という形で披露されました。

舞台の内容は、声優事務所に所属する若者たちを学生たちが演じる舞台で、学生たちにとってまさに等身大。声優のオーディションをめぐり、喜びや悲しみ、葛藤などが描かれました。さらに、舞台上で西キャンパス（美術領域・デザイン領域）の学生たちが制作したオリジナルアニメーションに生でアフレコするというユニークな演出もあり、特別客員教授で現役声優の郷田ほづみ氏にも出演いただき、大変楽しめるものとなりました。

キャスト以外でも、照明、音響、映像、舞台設営、舞台監督、演出と、すべてエンターテインメントディレクション&アートマネジメントコースなどの学生が担当し、専攻の垣根を越えたボーダーレスな公演となりました。

当日は、学生の一人がインフルエンザでダウンするものの、プロの若手俳優、長安大吉さんに急遽代役を引き受けていただき、無事に開演することができました。

Aチーム、Bチームによる2回公演で、会場には出演者の家族や友人と思われる方々も多数お越しいただき盛況となりました。学生たちは、これまで稽古を重ねてきた成果を、元気いっぱいに表現。まだ1年しか経っていないとは思えない完成度で、経験豊かなプロの俳優にも物怖じせず、しっかりと演じました。キレのいい動きと滑舌で、観客は物語に引き込まれました。劇中のアニメーションでは、高校生を演じる内容の作品と、ファンタジー色の強い作品が上演され、そのクオリティの高さも公演を彩りました。生アフレコのシーンでは、緊張感が高まり、客席は息を呑んで見守りました。ストーリーが学生の実際の状況に近く、親近感の湧く物語で、観客も満足している様子がうかがえました。

劇中にアニメーションのアフレコシーンがあり、生アフレコを披露。実際のアフレコ現場と同じように演じます。アニメーションは西キャンパスの学生有志の制作

特別客員教授 郷田ほづみ氏も本人役で出演。声はもちろん、佇まいにもオーラがあります。学生たちは、胸を借りのびのびと演技

舞台は、演劇、アフレコ、歌あり、ダンスありと、盛りだくさんの内容でした

照明、音響、舞台の設営もすべて学生。エンターテインメントディレクション&アートマネジメントコースの学生が主体となって、舞台を支えます

本番、3日前のリハーサル。この日、大事な役を演じる学生がインフルエンザに。代役を想定しつつ、リハーサルを繰り返す。緊張感が一気に高まりました

音楽領域　声優アクティングコース
エンターテインメントディレクション&アートマネジメントコース
教授　平光琢也

声優アクティングコースが始まって1年経ちました。今回の修了公演では、学生たちの明るく元気な姿を見ていただきたく、学生たちには見に来てくれた人たちが楽しくなるようエネルギーを出すようにと言っています。まだ1年ですし、それくらいのつもりでいましたが、皆、しっかりと芝居をやってくれて、非常に心強く感じています。とくにアフレコは、家で好きなアニメの音声を消して練習しているようで、皆、上手いですね。私自身、東京と行き来しているため、学生の稽古に長い時間を割けないのですが、学生たちは自主稽古をちゃんとやっているようで、言ったことがちゃんとできています。モチベーションも高く、1年間でずいぶんたくましくなったように感じています。

たった1年ですが、学生たちは多くの経験をしてきました。例えば、西キャンパスのライティングコースの学生たちが書いた脚本の台詞を録音、そこに、サウンドメディア・コンポジションコースの学生がSEや音楽を入れてラジオドラマを作りました。また、今回の公演でも使いましたが、学内にアニメーションを作っているグループがいくつかあり、声優アクティングコースの学生をキャスティングしたいということでオーディションを実施しました。

他コースからも、発表会に際しナレーションが欲しいと要望されて担当しました。さらに、大学外部では、西尾高校が創立100周年を迎えるということで記念事業が行われたのですが、そのオープニング映像のナレーションを学生が担当しました。こうしてさまざまな場所からお声がけをいただき、学生たちも、声の仕事の需要の大きさを実感できているのではないでしょうか。

2019年度からは、発声の先生や、殺陣、立ち回りの先生に来ていただき、さらに本格的な内容になっていく予定です。定期的に発表の場を設けていきたいと考えていますので、ぜひ見に来ていただければと思います。

マスター to アーティスト

【第44回】

＜ 挑んでこそ ＞

知識というよりも、どう感じるかということをきちんとしていかないといけないですね。情報があるだけでは駄目で、知識にするには感覚があって感じて自分の中に落とすことが必要。一度咀嚼して飲み込まないと。それが自分を出すということにつながるのだと思います

untitled（1999）
陶・200×208×200cm
撮影：長塚秀人

制作中、自重に耐えられず、いくつかの部分が崩落しバラバラに。接着剤でつなぎ合わせて復元しボルトで固定、なんとか形を保ったとのこと。しかし、この経験がその後へとつながっていくことになる

中田ナオト

（なかだ　なおと）
美術領域
アートクリエイターコース　准教授

フタバ画廊
個展
（2001）より
CCUP（2001）
陶・200×180×120cm
撮影：末正真礼生

1973　愛知県生まれ
1998　名古屋芸術大学美術学部デザイン科卒業（芸術学士）
2000　多摩美術大学大学院修士課程美術研究科修了（芸術修士）

■受賞歴・個展
1997　第５回日清食品現代陶芸［めん鉢］大賞展　新人賞
　　'97鬼かわらコンクール　審査員特別賞
2000　-overflowing-（フタバ画廊／東京）
2001　（フタバ画廊／東京）
2003　"nothing out of the ordinary "（目白オープンギャラリー／東京）
2005　－魔法使い－　（ギャルリー東京ユマニテlab ／東京）
2006　【尤もなこと】（ギャラリーオカベ／東京）
2009　TWINS（SAN-AI GALLERY ＋contemporary art ／東京）
2011　アーツチャレンジ2011（愛知芸術文化センター／愛知）
2013　2011ミネアポリスへの旅（SAN-AI GALLERY＋contemporary art ／東京）
2015　マイヤー×信楽大賞　日本陶芸の今－伝統と革新　陶芸の森特別賞
2016　現在形の陶芸　萩大賞展Ⅳ　佳作
　　中田ナオト －出会いとひらめきの信楽時間－
　　（滋賀県立陶芸の森陶芸館ギャラリー／滋賀）
2019　第３回瀬戸・藤四郎トリエンナーレ　審査員特別賞（秋山陽賞）

「陶芸のイメージって、ひげを生やしたおじいさんが、作務衣着て、ろくろ回して、駄目だ、パリーン！　そんなイメージだったんですよ」建築家になりたかったという。大学は建築関係に進みたかったがかなわず、建築に近いところへと考え、スペースデザインコースを志望していた。しかし、ひょんなことから陶芸と出会う。

大学へ入学して１ヶ月余り、知り合った友人に付き添って陶芸部へ赴いた。「陶芸なんて、全くやる気はなかったですよ。汚れるし、片付けもきちんとやらなきゃいけないし、やってみたら案の定うまくできない。１日で辞めました」。さんざんな出会いである。しかし、何かが心に引っかかった。「うまくできなくて嫌で辞めたと思っていたんですが、半年くらい経ってから、ふと、なぜかもう一度やりたいと思うようになりました。それからですね」。

デザイナーになりたいと入った大学だったが、２年経った頃には、表現者として進みたいと考えるようになった。自身の中で、その時点での選択肢は、作家性の強い版画か陶芸のどちらかだったという。「平面か立体か、そこが分岐点でした。僕は、立体を選びました」。

学生時代には、陶芸部を一緒に見に行った件の友人らとともに、グループ展を開催している。そのときには、すでに高さ１mを超える大きな陶芸作品を出展している。立体作品で大きなものを作りたかったというが、ノウハウもなければ作り方すらわからない。試行錯誤しながら、手探りで作品作りに挑んだ。「今思えば斬新な作り方をしていましたね。必要のないところで切っていたり……」。学生時代の間、試行錯誤は続いた。

大きな作品を作りたいと、失敗を重ねるうちに、魅力的に見えてきたのが多摩美術大学だった。「気になる作品の作家の経歴を見ていくと、皆、多摩美なんですよ。どうやって作っているのか知りたくて、多摩美の大学院へ進むことにしました」。中村錦平氏、井上雅之氏らの作品に憧れ、直接指導を受けることを望んだ。「時代や世代的なこともあったと思いますが、自由度が高かったですね。バブルの頃から、陶芸の世界では作品の大型化という流れがあり、小さな窯でも大きな作品を作ることができる、そういうノウハウを学びました。また、陶芸をどう捉えるか、捉え方はいくつもあっていいと当時から思っていましたが、そういう雰囲気もありました」。

願っていた大きな作品をものにした。しかし、そこで立ち止まった。自分の作品を見ても、自分でないものを感じてしまう違和感。憧れてきた作品だが、同じ範疇の作品と思われることへの反発だった。「このときから自分らしさとはどういうことなんだろうかと改めて考えるようになりましたね。そして大きく作品を変えることにもなりました」。憧れてきたが、自分よりも上の世代の作家が作っている作品で、それを後追いしているだけのように思えたという。自分の感じていること、自分の中で整理されていなくても、そのときやりたいと感じたことをもっと出していかなければならないと決断した。抽象的だった作品に、コーヒーカップ、携帯電話、掃除機……、日常的で具体的なモチーフが加わり、自分自身を客観視した作品が生まれた。陶芸という枠を超え、作品は広がりを見せた。

CCUPR (2002)
陶、鉄、ベニヤ、キャスター、塗料等・460×200×120cm
撮影：末正真礼生

Shigaraki Time
(2016)
陶磁タイル
(ピンホールカメラの
像を用いたダイレクト転写)

(T_T) (2008)
陶、鉄、鏡・85×85×333cm
撮影：斎城卓

changing minds (1998)
陶・274×60,276×58,275×61cm

困惑 (1996)
陶・120×83×32cm

TWINS –for Maple in Minneapolis (2011)
陶・52×130×20cm

ccup-i・ccup-ii・ccup-iii (2001)
コーヒーカップに転写、オルゴール
20×20×15cm・25×45×15cm・20×20×15cm×5
撮影：末正真礼生

内カラ出ルモノ (1998)
陶・174×92×74cm

untitled (1999)
陶・233×122×150cm
撮影：末正真礼生

フタバ画廊「overflowing」より
overflowing (2000)
陶・235×150×70cm
撮影：末正真礼生

東京郊外、多摩地区にあるアトリエ。作品づくりのほか、過去の作品もいくつか、このアトリエで保管されている

学生時代の作品。陶芸作品らしい肌が魅力的。下のめん鉢は、第5回日清食品現代陶芸[めん鉢]大賞展新人賞の作品

街中の三角コーンが気になる。さまざまな使われ方をスナップ。写真集にまとめられている

コーヒーのような日常的なものが、作品と大きなかかわりあいを持つように

「学生には『キャパオーバーしてほしい』とよく言っているんです」。失敗や挫折の経験がないと作品は良くならない。「これはやっちゃいけない、といった概念があります。でも、それを疑ってかからないと、新しい発見をしたり、新しいものを作ったりすることはできないと思うんです。手に負えなくなって駄目になったとしても、それを経験しないと得られないことがあると思います」。

単純に物理的に大きな作品を作るだけでも、重力、構造、技法と、考えなければならないことが急激に増えるという。「この２０年、デジタル技術の発展がめざましいですよね。以前なら未来のことと思っていたことが、けっこう実現できてしまっています。デジタルやコンピュータの進化で、どんどんやりたいことができるようになっていますが、もしかすると思うようにできないというところに可能性があるのではないかと思います。何より、身体と感覚と思考によった自分の実感を伴ってやっていくことに魅力があるように思います」。新しい技術と現代という時代の中で、土という実材と、自分の手を通した感覚への強いこだわりが感じられた。

クリエイティブ職だけじゃない！芸大生のキャリアは多様に拡がる

音楽領域で勉強して演奏家になる、美術領域で絵を描き画家になる、こうした思いを胸に本学に入った学生も多いはず。でも、実際にはそうならないのが人生の常。本人の努力や能力の問題だけでなく、個人を取り巻く環境や社会情勢、経済状況の影響を受け、多くの学生が志望とはすこし異なった道を歩んでいるのが実情です。こうした学生を支える仕組みが2019年度から本格的に動き出します。学生自身のサポートに加え、社会の要求に応えられるものを目指します。芸大に行ったのに就職するのはおかしいとか、芸大なんかにいって将来どうするのとか、そんな声はちょっと横に置いておいて、芸大だから身につけられること、芸大生のキャリアデザインについて、キーパーソン3人に語っていただきました。

自分が学んだことを社会に役立てる芸大生のキャリアデザイン

特別客員教授 **大内孝夫**

慶応義塾大学経済学部卒業後、富士銀行（現みずほ銀行）入行。いわき支店長などを経て、2013年より武蔵野音楽大学にてキャリア指導と会計学の授業を担当。ピティナ正会員、ドラッカー学会会員。著作に『「音大卒」は武器になる』、『「音大卒」の戦い方』、『そうだ！音楽教室に行こう』など多数。

名古屋芸術大学
学長 **竹本義明**

武蔵野音楽大学卒業後、名古屋フィルハーモニー交響楽団入団。1989年から名古屋芸術大学に勤務。大学からの海外派遣研究員として、英国王立音楽大学で古楽器をM・レアード教授に学ぶ。名フィルがプロ・オーケストラとなる時期に所属し、演奏に加えオーケストラの運営にも携わる。その経験を生かし、音楽マネジメント、公共ホールのマネジメントなどを行う。武豊町民会館館長。著作に『実践アートマネジメント～地域公共ホールの活用術』がある

キャリアセンター長
人間発達学部 教授 **中川直毅**

青山学院大学大学院法学研究科修了。複数の上場企業等で人事部長、法務室長、人事総務部長を歴任。専門は、労働法、経営人事論。TRAD社会保険労務士法人顧問、安村公認会計士事務所顧問、一般社団法人洛陽労働法務キャリア支援機構代表理事・理事長。著作に『要説 キャリアとワークルール』がある

『思い』がすこし弱いように感じる

中川：本日は、学長、大内先生を迎えて、キャリアを中心に、学生の皆さんのプラスになること、保護者の皆さんのプラスになることを伺いたいと思います。

学長は、トランペット奏者としてキャリアが始まり、名フィルに入団、その中で楽団の運営にも携わり、音楽やホールのマネジメントへと活動領域が拡がっていったと伺っています。大内先生は、もともとメガバンクの支店長もされていました。どんな経緯があったんですか？

大内：大学卒業と同時に銀行に入って、30年間勤めました。銀行員の場合、50代前半になると、銀行の関係会社や取引先の企業へ出向するケースがほとんどです。私の場合はあまり銀行を引きずっていたくないと思っていたところ、たまたま武蔵野音楽大学で募集があると伺いチャレンジしました。私は音楽が大好きで、銀行の人事部の記録には、そういう話が来た時のために「趣味」という項目があって、そこにフルート、ピアノ、合唱みたいなことを書いていました。そのため、音楽大学への話につながったんだと思います。

じつは高校時代、出身中学のブラスバンド部を指導している中で音楽大学に行きたいと思った時期がありました。その頃は音楽に夢中で、指揮者になりたいと思ったんです。高校2年でそのための勉強をし始めました。ところが周りからは、『お前、やめろ』と（笑）。才能がない、ソルフェージュ（楽譜を読んでそれを音にイメージし実際に演奏すること）ができない、これでは指揮者どころか音楽家になるのはとても無理だと。そういう意味では音楽の厳しさみたいなものは、その頃から知っていた気がします。私ができないことをできる音大生ってすごいな、という目で見始めたのが最初ですね。

中川：キャリアとしては、学長も大内先生も、その時々の縁と運が重なって、そこで軌道修正というか、大きな意味では目標に到達しているような感じですね。

大内：いえ、全然ですね。逆に全部かなわなかったです。

中川：でも、音楽大学にお勤めになるということでかなっていますよね。

大内：学生時代とはまったく別な形ですが（笑）。それは確かに。

中川：僕は、若いころ高校の教員になりたかったんです。でも、いろいろな誘惑に負けて民間企業へ行きました。法務部や人事部で能力開発という社会人教育などをやっていて、やっているうちに大学に勤めることになったわけですから、ある意味かなったかなと。思いがどこかにあって、それを意識していると、いつかは何かに重なるように思いますね。学生の皆さんも、何かになりたいと的を絞り過ぎるのもどうかと思いますが、思い続けるということはいいことかもしれませんね。

学長：最近の学生というのは、『思い』がすこし弱いように感じます。楽器をやったり、歌を歌ったり、昔でしたらそれを生かしてプロを志したものです。演奏家になれるなれないは別にして、そういう『思い』が強くて、学生時代一生懸命頑張ったものです。そういう姿を見て周りの同級生や後輩があこがれる時代でした。今は逆ですね。すぐに結果が出ないようなことをなぜ一生懸命やるのかわからない、そんな雰囲気があるように思います。

中川：『思い』の部分が強いようなイメージもありますが、実際には弱いのかもしれませんね。

2011年、大学の設置基準にキャリア教育というのが入ったわけですが、各大学で行われているキャリア教育というのはバラバラで、決まったフォーマットのようなものはありませんね。

大内：そうですね。

中川：学長がおっしゃったような部分を補強する、あるいはサポートして応援するようなカリキュラムも、あるようでないですね。キャリアデザインというものがあったとしても、『思い』を強くするようなものではないし、自分に何が向いているか考えるようなものでも、細か過ぎてわからなくなってしまうように思います。

女性が仕事を持つことで変わってきた

中川：教育というシステムだけじゃなく、芸術大学は教員と学生の距離が一般大学にくらべ近いですね。教員や先輩などとのいろいろな接触が学長のおっしゃる『思い』につながっていくのか、そのあたり、何かお考えになることはありますか？

学長：自分の学生時代を思い返すと、少人数教育ですよね。一対一で教員と接する。そこから得るものは大きいですね。

もともと音楽大学で演奏家を目指す人には、就職という概念がないんですよね。ピアノをやっても、歌をやっても、就職するという概念がないわけです。唯一、就職というと、教員になることでした。今でこそ芸大生も就職しなきゃといいますが、自分の時代は、就職するんだったら教員になりなさいと。当時、オーケストラは、給料なんてあってないようなものでしたから。

中川：そういえば、オーケストラをやっている方々も、高校などの非常勤講師をやりながら生計を立てていると聞いたことがあります。私は企業の人事部で採用をやっていましたが、音楽学部のイメージはあまり湧いてこないんです。美術学部とデザイン学部の人は、製造業でも製薬業でもそういう人材を求める部分があります。

学長：確かに環境の変化はありますね。思っているだけでは駄目で、『思い』に対し、いろいろな変化があると思うので、それに対応してその都度調整する、そういう能力が必要になってきていますね。

大内：中川先生がおっしゃったように、たぶん学長が学生だったころと、今の時代は全く違うのではないかと思います。何が違うかというと、音楽大学の場合、学生の8割から9割が女性です。従来、彼女たちの卒業後の進路は、家事手伝いを経て結婚するか、就職した場合でも2、3年で寿退社し、専業主婦になるのが一般的でした。そのため1990年のデータでは、30歳までに9割近くの女性が結婚していました。それが現在は約5割。しかも結婚後も働くのが普通のことになっています。

「女性活躍推進」というのは、言葉の響きはいいのですが、同時に男性の没落を意味します。というのも経済のパイがバブル崩壊後、それほど変わらない中で女性が進出していますから、従来のポストからはじき出される男性も多くなりました。そのため将来への経済的不安から、正社員女性との結婚を望む人が多くなっています。離婚も増え、いや応なく自立を迫られることも。音楽大学に限らず、社会はこのような変化を意識する必要があると思います。

学生の気持ちをサポートするような取り組み

中川：環境が変わってきていることはよくわかりました。大内先生の著書には、楽器ごとの演奏者の個性みたいなことが書かれてますが、あれが大変面白い。どんな意識で書かれたのですか？

大内：私が音楽大学に来て感じたことなんですが、声楽の人は、自己表現力やセンスに秀でていますし、木管楽器は細やかな気配りができる学生が多いなと思います。トランペットなどの金管楽器ですと、朗らかで前に出ていくタイプ。それぞれに良さがあります。人間、弱みを克服することは難しく、強みを生かすほうがいいと思います。ただ、強みは、自分ではなかなか気が付かないもの。ですから、できるだけ気が付けるようアドバイスすることを心掛けています。自分はどうなんだろう、何が強みなんだろう、どう生かせばいんだろうと考えるところに、豊かなキャリア形成のヒントがあるのではないでしょうか。

中川：今、学長と大内先生の話を聞いて、2つのことがあると思います。一つは、何かがしたい、これがやりたいという『思い』がぴったりとかなわない人がいます。芸術大学には、これがやりたいと思って来ているわけですが、ぴったりのところへいけず、卒業後は、専門以外の仕事に就いている。そういう部分を考えた場合、パラレルキャリア的な、本業もありながら社会貢献活動として学んだことを生かす、そういう生き方も出てきました。このことについても、すこしお伺いしてみたいです。

もう一つはキャリアデザインですが、現在、文部科学省が進めているようなキャリアデザインは、社会とのつながりも大学でやって下さいと言っています。キャリア教育して、なお且つ、社会とのつながりも含めやっていく力を身につけさせる、そのどちらもできる教員が少ないのが世の実情かなと思っています。総合的に融合した視点で考えている人がいないのではないでしょうか。

学長：演奏家になる、あるいは美術の作家になるといった、強い思いを持っている学生は、自分の活動を第一に考えながら、生活のためにアルバイトをしたり、周辺領域の仕事を

したり、いろいろやっています。それをずっと続けている人もいれば、途中であきらめてしまう人もいます。そこで気持ちの持ち方なんですが、あきらめてしまった場合、自分がやってきたことに対して挫折感を持ってしまうことが多いです。しかし、もっとポジティブに考えて、これまでやってきたこと、創造性のある仕事をしてきたことを「自信」として捉えられれば、また違った展開があるのではないかと思います。

キャリア教育については、先ほど中川先生がおっしゃっていた授業科目、それらはもちろん必要なんですが、それに加えて学生一人一人にあなたがやっていることは素晴らしいことなんだよ、ぜひ続けていきなさいと気持ちをサポートするような取り組みが必要なのかなという気がしています。

企業は「やり遂げ感」を見ている

中川：企業は採用の時、『やり遂げ感』というのを見ています。面接ではいろいろなことを見ますが、ポイントは2つしかなく、うちの会社が好きかどうか、もう一つが『やり遂げ感』です。一般大学の場合は、クラブやサークルの話が中心になります。その点、芸術大学はサボっていたら卒業できないわけですから、しっかりとやってきたことが話せますね。社会に求められるものが直接的に養われているのを感じます。

学長：音楽の場合ですと、レベルに応じて曲が渡され、その曲を一つ一つ仕上げて試験を受けていきますよね。しかも、そういう機会が数多くあるわけです。美術やデザインの場合ですと、作品を作って提出していく。

ただ、音楽と美術やデザインと違うところがあって、音楽は「いついつまでにこれを仕上げてこういう演奏会をしなさい」という時間芸術なんです。ところが、美術は空間芸術で、展覧会に出しますが、いつまでも手を加えることができる。作品として飾っていても、どこかで手を入れているかもしれませんよ（笑）。

中川：なるほど。期限に対しては、専攻によって意識が全然違うんですね。

学長：音楽を学ぶ学生は、時間芸術ですから、時間を守らなければ仕事にならない。守れなかったらすぐお払い箱です。特に管楽器は1人1パートですから、いなければ全体が駄目になってしまいます。

中川：これはいいことを聞きました。ビジネスに置き換えて考えると、例えば音楽系の人が企業に入ったら、チーム力というのは絶対大丈夫ですよね。責任感が養われている。

学長：そういうのが全部入っている。管楽器だとオーケストラ、ブラスバンドがあり、音楽をやっているんですが、スポーツ系なんですよ。集団の中での自分の立ち位置もわかりますし。

中川：音楽学部の人を企業に売り込むにはどうしたらいいんだろうと思ってましたが、ここに答えがありましたね。

大内：売れる材料がいっぱいありますよ。

中川：美術やデザインについては、製造業などの企業では、デザインや美術的な能力を求められる要素がたくさんあります。ですから、本学の場合は、どちらにも対応できる。芸術には、直接的ではないかもしれませんが、間接的に対応できる力を養うことのできる部分がありますね。

大内：そうですね。美術でも音楽でも共通するところでお話しすると、事実と価値ということだと思うんです。1+1=2だよ、というのが事実教育。今までの日本はこうした事実教育が偏重されていたと思います。美術や音楽は、価値があるかないかを考える教育だと思います。AIが発展すれば、「事実」の部分はAIに任せればいい。そうではない「価値」の部分、これは人間がやらないと。その意味でこれからの時代、価値について考えることが非常に重要になってくる。美術や音楽を学ぶ意義は、かつてないほど大きくなってくると思っています。

中川：学長のおっしゃったことに、気持ちをサポートする部分というのがありました。気持ちをサポートする部分というのは、価値の話につながってくるのかなと考えました。継続的にサポートしていく、いろいろな対応をしていくということになるかと思いますが、そのあたりの本質的なところは価値のお話とつながりがありそうだなと思います。

大内：パラレルキャリアの話について、私自身の考えを言うと、ライフステージによって違うんだろうと思います。若いころは、自分のベースになるものが少ないですから、一つのことに一生懸命になることが重要です。一つのことに取り組んだことがベースになって、それが他のことにつながるのではないかと思うんですね。

私自身、銀行員として必死に生きてきましたが、勝てないわけですよ。支店長にはなれたけど、役員にはなれない。その時にどうするかといったら、次のステージです。そこでは銀行員としてやってきたことがベースにあるので、パラレルキャリア的なこともできる。大学職員、教員、著者、みたいに。

キャリア教育のことですが、先生たちの前でいうのは大変失礼かもしれませんが、大学の教員はキャリア教育に向きにくいと思うんです。というのも、教員は多くの場合、成功者ですから。しかし、キャリアというのは、中々上手くいかない。私の人生を振り返っても、ほとんどは失敗です。大学受験では志望校に落ちて、一浪しても合格できず、銀行に入っても同期との戦いで敗れてと。人生、たいていの勝負は負けなんです。一方、教員はごく少数の勝負に勝った人。負けた時の悔しさ、惨めさを味わった経験がない場合が多い。勝負に負けてもどう生きていくかを教えるのが、僕はキャリア教育だと思っています。

どんなキャリアでもちゃんと完遂できる

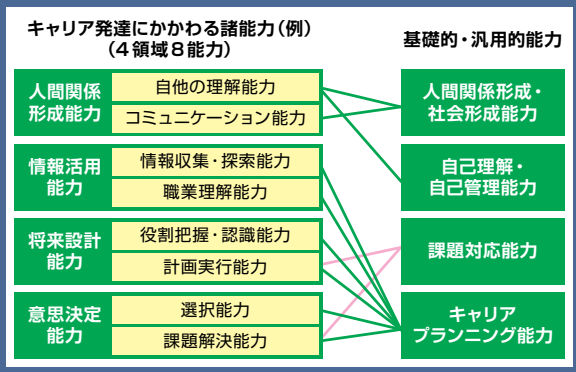
中川：キャリア教育なんですが、文科省や厚労省でいろいろなことを言っていますが、詰まるところ、文章作成と情報収集発信、状況判断と行動力、こういうことを指しているように思います。一般大学であれば、そうしたカリキュラムを組んで講座を設置しますが、芸術大学は普通のカリキュラムの中にこうした要素がたくさん含まれてます。そうした芸術を勉強することに加えて、プラスアルファになる力とはどういうものだと思われますか？

大内：今の企業は、がんじがらめなんですよね。コンプライアンスとアカウンタビリティーとガバナンスと…。ただ、イノベーションというのはいろいろなものの組み合わせで生まれて来るものです。音楽に何を組み合わせられるか、何か別の要素を上手く組み合わせることで発展できるのではないかと思います。それを教えるのもキャリア教育の重要な役割。例えば音楽に経営学を組み合わせることで音楽教室を発展させられる、音楽とイベントを作ることに長けていれば演奏家派遣業ができる。演奏家で生きていこうとすれば、ト

2004年、文部科学省は「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」の中で、キャリア教育で必要な力を「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つの領域にまとめ、さらにそれぞれの領域について2つずつの能力を示し、キャリア教育推進計画の一例として紹介しました。ところが、一例に過ぎないモデルのみが拡がり、紋切り型のキャリア教育ばかりが計画されることとなってしまいました。また、高校教育までのモデルであったため、これらが生涯を通じて育成される能力という観点が薄いものとなっていました。

そこで、2011年に「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について（答申）」により、「基礎的・汎用的能力」として再提示され、4領域8能力との関連があらためて示されました。こうした能力は、職業や働くことについてどのような考えを持つか、各人が役割を果たしつつどのような職業に就きどのような人生、職業生活を送るのか、ということに深くかかわっています。こうした意味において、自らの勤労観・職業観の形成・確立を図ることは極めて重要である、としています。

これらを踏まえ、本学では芸術大学としてのカリキュラムを加味、また、大学教育の国際化に対応し、2019年度より新たなる教育改革の取り組みとして「Worldeaプロジェクト」を実施いたします。



ップを目指すしか生きる道はありませんが、音楽と何かを組み合わせることでほかにはない、新たな価値が生まれます。お客さんのニーズに上手く合う時には爆発的に発展する可能性もあります。

『思い』がかなわなかった時のために必要なのがキャリア教育と言っていますが、決して就職だけではありません。演奏だけで生きていけないと思った時に次にどうするか？ 何と組み合わせるか？ 得意な何かを組み合わせて起業することだって選択肢のひとつです。美術と組み合わせてクラシック漫画家で成功している人もいます。

その意味で、来年度から始まる『Worldea』の中にアントレプレナー育成が入っていることは素晴らしいなと思います。音楽や美術を起点にして、いろいろなビジネスがあり得るのではないでしょうか。そういったことに気付かせる教育ができれば、芸術教育の価値をさらに高められるのではないかと思います。

学長：今までの音楽大学の教育は、技術を取得してプロを目指すということなんですね。ところが、入学していろいろ学んで試験を行うと、自分自身の立場だとか他の人の実力というのがわかりますから、自分はこのままプロを目指していけるのかいけないのかわかるわけです。挫折感を持ち、このまま続けていっていいのかという葛藤が始まります。それでも頑張って一流になっていく人もいます。でも、ほとんどの学生は、残りの学生時代をどうやってやり過ごすか、そう思ってしまうのではないかと思います。

この『Worldea』の場合、トップを目指すこと、海外に出ていくこと、それから専門に軸足を置きながら違った領域に興味を持って専門にプラスアルファを加えることがプログラムとしてあります。僕の同級生や後輩でも、演奏家にならず、海外の楽器店に勤めたりしている人がいます。音楽科の場合、プロになれなかったというと挫折感があって、人に言いたくない面があったりするんですよね。立派なことなんですけど・・・・・・。

大内：思い込みがあるかもしれません。3歳からピアノをやってきてピアニストになれないと、私にはピアノ以外ない、みたいな。そこをサポートするのがまさに我々の仕事だと思います。

学長：一般企業にとっても、芸大生というものはいろいろな活用方法があるはずです。それを開拓していかなければならないと思っています。ただ一番難しいことは、僕自身はやはり学生の気持ちの持ち方だと思っているんです。どこかで挫折を味わっても、それをあまり否定的にとらえず、違った要素を勉強してまた一回り大きくなって…、そうしたことを繰り返すことによってキャリアは構築されていくものですし、生きる力となっていくのだと思います。

中川：どういうキャリアでもちゃんと完遂できる。これ、大事なことですね。

多様なキャリアがあるということ 学生も教員も認識すること

中川：こういうこともありました。法学の授業を持たせてもらっていますが、法学の授業は人気がないんです（笑）。その中で、ものすごく勉強してくれる学生がいて、すごくうれしくなってほめたんです。音楽総合コースの学生さんで、ピアノで苦労しているらしいのですが、こんなにほめられたのは初めてです、と手紙をくれました。こっちが涙が出そうになりましたよ。学長のお話を伺って、その子はしんどく思っていたところがあったのかなと。そこをサポートするようなことをすればもっといいのかなと思いますね。

大内：キャリア相談室に来て突然泣き出す学生は、案外多くいるものです。多いのが、本当は就職したいのではなくピアノでやっていきたいんだとか、あるいは、就職面接を受け、音楽大学まで行ったのにどうしてうちの会社を受けようと思ったのと言われ、それに傷付いて駆け込んできたりだとか。そういう人たちに、今までやってきたことはすごいことだよと言ってあげたい。私のように音楽大学に行けなかった者からすると、本当にすごいことじゃないですか。そこは、こっちが本気ですごいなと思うことを言ってあげることで思いは通じます。それが手紙を書きたくなる気持ちの原動力なんだと思います。

中川：芸大生というのは、素直で素朴さがあるなと。授業をすごく真面目に聞いてくれるという点もありますね。一般大学よりも真面目に受講してくれますよ。

大内：それについては、就職支援会社の人が、すごく真剣に聞いてくれると驚いていましたよ。やっとそのあたりの人が気付きだしたところです。私も会計を教えてますが、みんな授業への参加意欲が旺盛です。

学長：知多半島のある市の市民会館の館長さん、女性なんですが、ご主人が本学の卒業生だったんです。サウンドメディアコースの1期生で、今は経理関係の仕事に勤めているとおっしゃっていました。

中川：音楽ができて経理ができるんだったら、なんとでもなりそうですね。

大内：音楽だけをずっと追い求めていくと道は開けにくいのかもしれませんが、冷静に見て、そこに何を加えていけるか。それから、これまでやってきた頑張り。それまで頑張ってきたというのは、それだけで大きな実績です。それをどう上手く次のキャリアに生かしていけるかが大事です。そこに気付かせてあげることが私たちの重要な役割だと思っています。

学長：僕らが学生だったころの教員というのは、きつく上から指導する、逆らえないような指導でした。今ではなくなってきましたが、まだ、そんな面が消えたわけではないように思います。就職なんかにしても、教員たちも、私がこんなに教えたのになぜ違う道へ行くのか、そんな気持ちを持ってしまうところがあるのではないかと思います。

大内：確かに、「就職したい」と教員に言えない学生も多いです。自分では音楽でやっていけないとわかっていても、教員には怖いから言えない、というのはよく聞きます。

学長：教員の意識も変えていかないといけないですね。

中川：確かにそうですよね。学生も教員も保護者も、意識を変えていくことがとても大事なことかもしれません。それが進歩につながる。

大内：多様なキャリアがあるということを、みんなが共通して認識することが大事ですね。

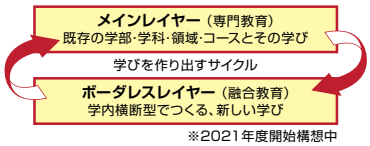
中川：就職というより、やっぱりキャリアですよね。その最初の部分に大学が養分を与え、幹を作っているような感じですよね。企業も、時代に合わせてメンバーシップ雇用からジョブ雇用（終身雇用を前提としたメンバーシップ雇用に対し、職務そのものへ人を当てる雇用形態）へと変わって来ていますからね。単に、企業に就職するのではなく、自分のキャリアをどう作っていくか。その基盤となるところを大学で作っていくということですね。

Worldeaプロジェクト　既存の教育コンセプトとの関係性

教育改革 **Worldeaプロジェクト**　芸大の固定概念を打ち破る教育で、学生の世界を拡げる・深めるプロジェクト

	オナーズ	大学全体	成果の可視化
アート/エデュケーション セクション	■有名講師による マンツーマンレッスンカリキュラム（芸術学部） ■保育・芸術文化を学ぶ海外研修（人間発達学部）	■有名講師による公開講座 ■全学総合共通科目（アートプロジェクトなど）	■アート・音楽分野での各種受賞歴 ■進学実績、海外留学実績
グローバル セクション	■英語コミュニケーション ■プレゼン・ディスカッション ■特別講座 ■留学（ブライトン・デンバー／学術交流協定校ほか）	■英会話ラウンジ ■3段階レベル別正課英語授業	■特別講座アセスメント（4技能） ■正課英語授業 ■プレイスメントテスト ■アチーブメントテスト（2技能）
キャリア セクション	■思考力向上特別講座 ■キャリアプランニング特別講座 ■アントレプレナー育成講座	■企業からのオファーサイトにてポートフォリオ作成・運用 ■思考力アセスメント活用講座	■社会が求める「思考力」アセスメント

教育システム **BORDERLESS**
専門教育 ＋ 分野を越え融合した新しい学び
＝ 分野を問わず活躍できる人材育成



※2021年度開始構想中

教育理念 **至誠奉仕**
人間性の不断の陶冶・
豊かな感性・想像力に富んだ人材

News & Topics ニュース&トピックス

美術領域　デザイン領域

2018年度 ブライトン大学賞授与式と祝賀会が行われました

2018年度ブライトン大学賞の授与式と祝賀会が、2019年2月22日（金）に本学西キャンパスのB棟2階大講義室で行われ、グランプリ1名、優秀賞1名、奨励賞2名と佳作6名の合計10名の優秀者が表彰されました。

「ブライトン大学賞」は、本学と姉妹校提携を結んでいる英国のブライトン大学が、本学の卒業制作作品の優秀者に贈る賞となり、本学からは、ブライトン大学の学生に対し「名古屋芸術大学賞」を贈っています。毎年、相互の交流を深めており、今年で、姉妹校提携22周年を迎えます。

本年度は、ブライトン大学からAmanda Bright先生（美術学部学部長）と、Duncan Bullen先生（美術学部 副学部長）が来日され、本学西キャンパスの各会場を廻って作品を審査し、受賞者が決定しました。

2月22日の授与式では、国際交流センター長の水内智英が開式の挨拶を行い、続いて竹本義明学長が歓迎の言葉を述べました。

この後、Duncan Bullen先生から、挨拶とメッセージのスピーチがありました。

引き続き、各賞の発表と入賞した作品についての講評が行われ、Amanda Bright先生から、受賞者一人ひとりに表彰状と賞金が手渡され、授賞式が終わりました。

グランプリ	渡邉　明衣	「spirit」
優秀賞	伊藤　渓又	「一坪の贅沢-中間領域としての小屋の提案」
奨励賞	宮前　光希	「愛憎、命脈など（ドライポイントによる一連の作品）」
	高田真絵奈	「角字×ヒト×モノ」
佳作	川西　朗羽	「付喪神の集ひ～平成最後の晩餐会～」
	荒木　紀充	「Mobility as a Tool」
	森　瑞季	「Nature Palette」
	井上　七海	「キュウブ」
	中村　千里	「七十二候グラフィックス」
	小幡　信仁	「顔ハメ道十七次」

美術領域　デザイン領域

第3回 みんなのハッピーカーコンテスト 本学カーデザインコース学生が審査員を務めました

子どもたちの豊かな夢を育む環境を地域で広めていくことを目指す教育支援事業「みんなのハッピーカーコンクール」に、本学カーデザインコースの学生が審査員として参加しました。このコンクールは、NPO法人Meets Visionが主催するコンテストで、今年で3回目。小学生を対象に、今回は「家族でおでかけするクルマ」をテーマに作品を募集。1,599点もの応募作品からカーデザインコース、洋画コースの学生が審査を実施、また、優秀作品の副賞として贈られる記念の盾をメタルコースの学生が制作しました。そして3月17日（日）に、愛・地球博記念公園（モリコロパーク）地球市民交流センター体験学習室にて表彰式が行われました。

審査は、2月18日、19日の2日間。卒業制作展の準備が進行中の西キャンパス体育館で行われました。床一面に作品が広げられ、1年生から3年生までの低学年部門、4年生以上の高学年部門に分かれ、それぞれゴールド賞、シルバー賞、ブロンズ賞と、合計6つの優秀作品を選出しました。表彰式の会場には、審査する様子の写真が飾られ、来場者は興味深げに見入っていました。

表彰式では、審査を行った学生らが作品についてコメントしました。多数の親子連れで満員の会場の中、緊張の面持ちで、作品の色合いやアイデアと発想の豊かさについてコメントしました。審査員の代表として、カーデザインコースの中條桂佑さんが講評を行い、「普段からアイデアで悩むことがあります。子どもたちのアイデアがとても面白く勉強になりました。素晴らしい発想で、応募してくれた皆さんはカーデザイナーになれそうです。来年もぜひ応募して欲しいです」とまとめました。副賞で贈られた盾も展示され、受け取った受賞者は顔をほころばせ、家族と一緒に記念撮影する姿が見受けられました。

このほか会場では、カーデザインコースの学生らによる、ぬり絵のワークショップが開かれたり、愛知県警の交通安全講習が開かれるなどして、盛りだくさんの表彰式となりました。

副賞の盾は本学メタルコースの学生が制作

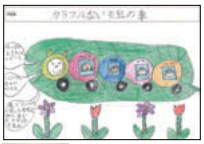
作品を前に審査する学生たち

表彰式では、学生たちが作品の講評を行いました

コンクール受賞者のみなさん

ぬり絵のワークショップ

低学年部門（1～3年生）



ゴールド賞 カラフルないも虫の車

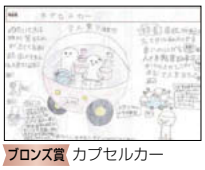
シルバー賞 ジェットキ1号

ブロンズ賞 地球どこでも車

高学年部門（4～6年生）

ゴールド賞 みんなでかいてき！おでかけカー

シルバー賞 海と空に行けるハッピーカー



ブロンズ賞 カプセルカー

出Books版

教職員著作の出版物のご紹介です。
※編集期限までに報告されたもの

■西村和泉　翻訳（共訳）
デザイン領域
文芸・ライティングコース
准教授

『新訳ベケット戯曲全集2 ハッピーデイズ 実験演劇集』

●著者／サミュエル・ベケット
●監修／岡室美奈子・長島確
●出版社／白水社

表紙の写真

第46回卒業制作展／第23回大学院修了制作展より
洋画2コース 三好梨央
「人瑪瑙」（左）
「有機的な石」（右）

「名古屋芸大グループ通信」ウェブサイト

発　　行：名古屋芸術大学
企画・編集：広報企画部
デザイン・協力：くまな工房一社
印　　刷：㈱クイックス
発　行　日：2019年4月25日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学　広報企画部
〒481-8502
愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
電話　0568-24-0359
FAX　0568-24-0369
E-mail：grouptu-shin@nua.ac.jp

Japan Institution for Higher Education Evaluation
JIHEE since 2004
UNIVERSITY 2017

※記事中のホームページアドレスは、掲載先の諸事情で移転や閉鎖されている場合がございます。あらかじめご了承ください。